

十三七つ。

七つの海を、

朝から越えて、

南のはてど、

闇の夜になつて、

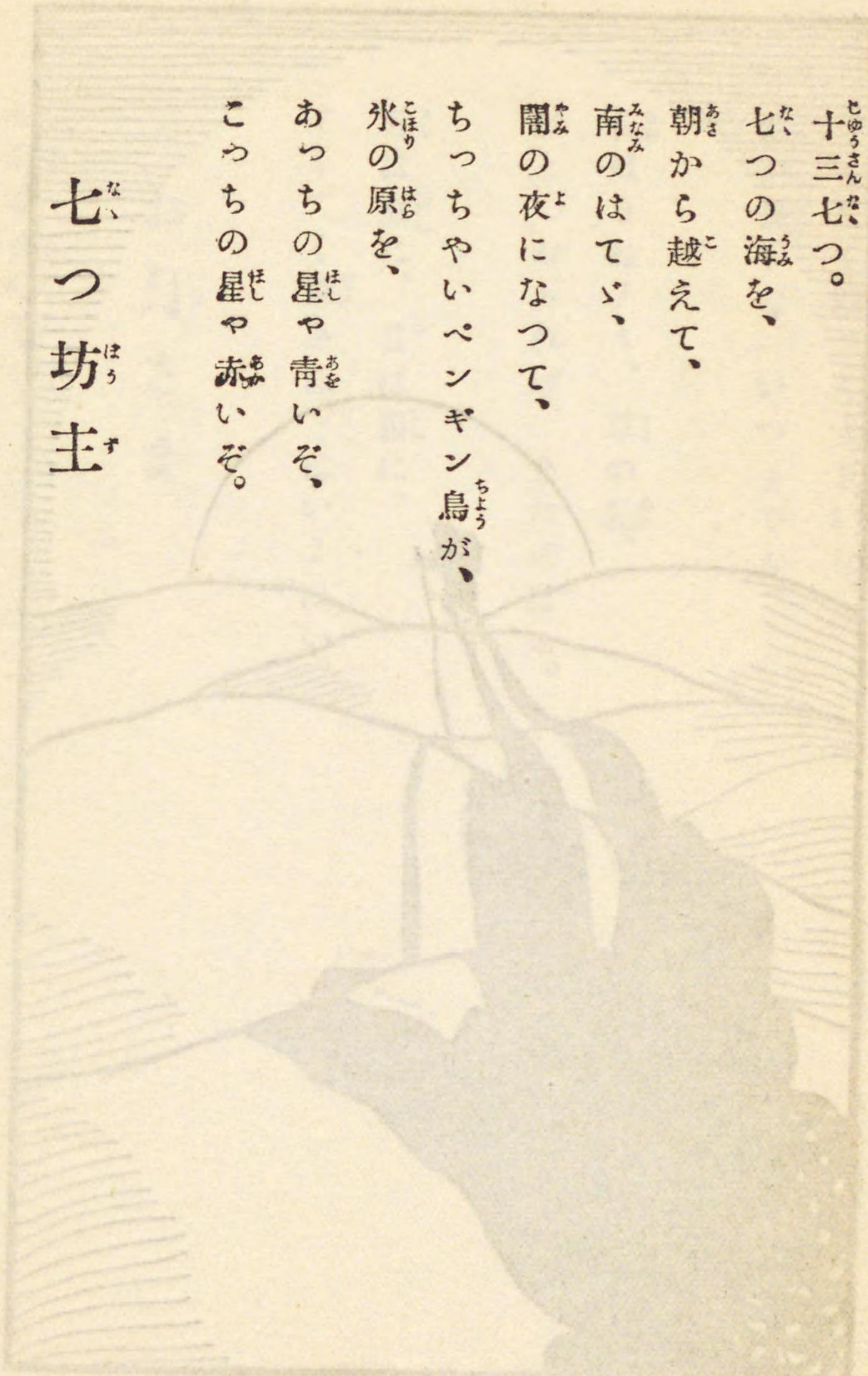
ちっちゃいペンギン鳥が、

氷の原を、

あつちの星や青いぞ、

こつちの星や赤いぞ。

七つ坊主



もう日が暮れる、

逢魔が時よ。

はよはよ、歸れ、

残れば恐い。

一丁目の闇に、

坊主が出たぞ。

ぼつつり、坊主、

ぼつつり、一人。

二丁目にちようめの闇やみに
坊主ぼうずが出たぞ。

ぽっつり、坊主ぼうず、

ぽっつり、二人ふたり。

連れてけ、坊主ぼうず、

泣なく子こがあるぞ。

七ななつ坊主ぼうずが、

ぽっつり、ぽっつり出たぞ。

【註】もと、東京の街では、日が暮れると、きまつて七つ坊主と云つて、七人連れの坊主

が通つたものださうです。

ころころころ橋

ころくころ橋、ころく橋、

ころくころげて誰が来た。

ころくころ橋、ころく橋、

ころくころげて餅が来た。

ころくころ橋、ころく橋、

ころくころげて海老も来た。

ころくころ橋、ころく橋、
ころくころげて柚子が来た。

ころくころ橋、ころく橋、
ころくころげて羊齒も来た。

ころくころ橋、ころく橋、
ころくころげて春が来た。

すべり橋

お月さんのうへに、

すべり橋かけた。

するりと、光つて、

すべりすべり落ちた。

お星さんのうへに、

すべり橋かけた。

ころ、ころ、光つて、

すべりすべり落ちた。

お嫁入り

馬でおむかへ、お婿さん、

けふは袴かみしも、はいどうぞ。

牛うしで嫁よめ入り、お嫁よめさん、
白しろい綿わた帽子ぼうし、しつたんく。

村むらと村むらとのまんなかで、
空そらは月つき夜よになりました。

牛うしにのりかへ、お婿むこさん、
扇あふぎひらいて、しつたんく。

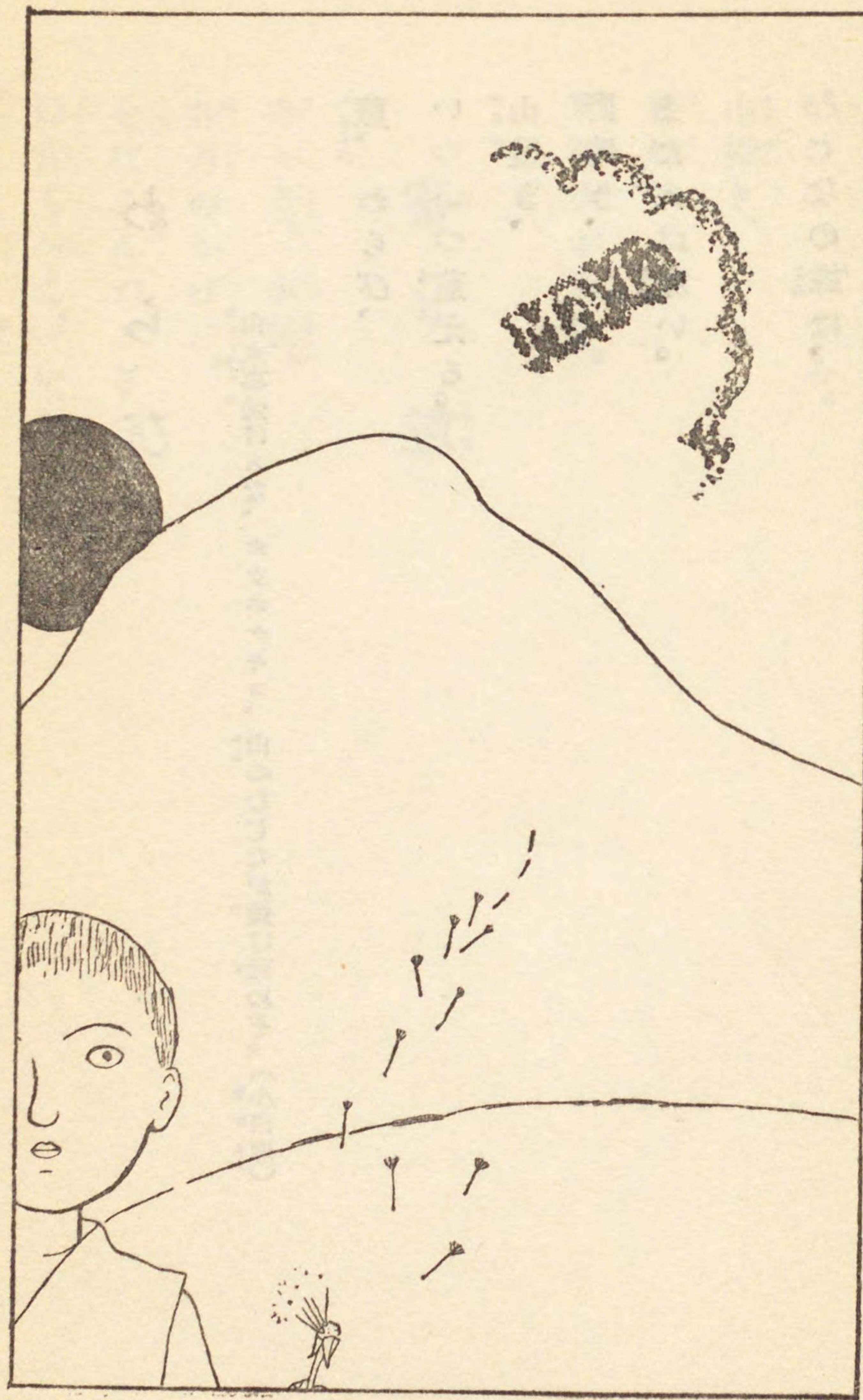
馬うまに鞍くらがへ、お嫁よめさん、
長ながいふり袖そで、はいどうぞ。

嫁よめちや嫁よめちやと、子こ供どもたち、
あかい提ちようちん灯とう ふりたてた。

はいしどうぞ、しつたんく、
やんや、めでたや、ほうやほう。

山やまのあなたを

山やまのあなたを、



見わたせば、
あの山戀し、
里こひし。

山のあなたの、
青空よ、
どうして入り日が、
遠ござる。

山のあなたの、
ふるさとよ、
あの空戀し、

母こひし。

わらび

山火事焼けるな、ホウホケキヨ、山のむじなが焼け死ねぞ。(小田原)

蕨、わらび、

いついつ萌える。

山焼き、

野焼き、

まだ火は赤い。

むじなの嫁は、

いついつ来やる。

山焼き、

野焼き、

夜は火が赤い。

寄り道

寄り道、小道、

牡丹のかげに、

をばさんがござつて、

いたちっこ、いたち、

はようちへ歸れ。

寄り道、小道、

あやめの中に、

をちさんがござつて、

いたちっこ、いたち、

はようちへ歸れ。

陽

炎

かげろふ、かげろふ、

なにしてる。

ちらちら、堇をさがしてる。

かげろふ、かげろふ、

なにしてる。

むじなのお宿をのぞいてる。

お晩さん

紅させ、

紅させ、

西のそら、

東は月夜になりました。

紅べにさせ、

紅べにさせ、

お晩ばんさん、

お空そらの母かあさん、日ひが暮くれた。

紅べにさせ、

紅べにさせ、

月つき夜よには、

野の鴨がもも飛とびます、雲くもも出でる。

こぬか雨あめ

こんこんこさめ小雨あめの

ねこやなぎ、

こぬかの小雨こさめがかゝります。

こんこんこさめ小雨あめの

こぬか雨あめ、

こんこんこまかにおしめりか。

こんこんこさめ小雨あめの

ねこやなぎ、

ねんねの寝ねた間まにおしめりよ。

こんこん小雨の

こぬか雨、

明日は堇も咲いてましよ。

こんこん小雨の

ねこやなぎ、

ねんねもすやすやすみす。

あれはときがね

ああれは時鐘、まだ五つ、

まだ五つ、

夜明の明星も出たばかり。

ころころ蛙もまたねたに、

またねたに、

もいちど、ねんねよ、おころりよ。

お夢のつゞきはまた惜しい、

まだ惜しい、

泣いたら消えましよ、ちぎれましよ。

七つのお鐘が鳴るまでは、

鳴るまでは、

とろとろ、ねんねよ、おころりよ。

お日さま見えたらお迎へに、

お迎へに、

牧場のはてまでまゐりましょ。

お日さまお日さま、お土産は、

お土産は、

大きな紅薔薇、パンと乳。

ほうほう螢

ほうほう螢、篠螢、

晝間は赤い豆頭巾、

日暮れはピカピカ、豆袴、

一のお宮で灯を貰うて、

二の宮田圃へ灯とぼしに、

三の鳥居は藪の中、

四の宮くぐれは貉堀、

貉が啼き出しゃ、雨がふる、

はよはよお戻り、夜は凄い、

真夜中過ぎれば歸られぬ。

ほうほう螢、篠螢、

水神様はまだ遠い。

あわて床屋

春は早うから川邊の葦に、
蟹が店出し、床屋でござる。
チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

小蟹ぶつぶつしやぼんを溶かし、
親爺自慢で鉄を鳴らす。
チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。



そこへ兎がお客にござる。

どうぞ急いで髪刈つておくれ。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

兎あ氣がせく、蟹あ慌てるし、

はやくはやくと客あ詰めこむし。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

邪魔なお耳はびよこびよこするし、

そこで慌て、チヨンと切りおとす。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

兎あ怒るし、蟹あ耻よかくし、

しかたなくな穴へと逃げる。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

しかたなくな穴へと逃げる。

チヨツキン、チヨツキン、チヨツキンナ。

ちんころ兵隊

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、

ちりちりちんころ、ちりちりちん。

ちんころ兵隊、喇叭卒、

手毬てまりの中なかに
なにがゐて跳はねる、

てんてん手のなし、

めんめん眼めのなし、

みんなん耳みみのなし、

うさうさ兔うさぎの子こが跳はねる。

一ひとつ追おひ出だそ。

二ふたつ追おひ出だそ。

三みつつ追おひ出だそ。

四よつつ追おひ出だそ。

五いつつ追おひ出だそ。

六むつ追おひ出だそ。

七なつ追おひ出だそ。

八やつ追おひ出だそ。

九こつ追おひ出だそ。

手毬てまりてんてん、雪ゆきこんこん、

遠とほいお山やまの山奥やまおくへ、

十と、とうとう追おひ出だした。

兔うさぎの電報でんぱう

えっさっさ、えっさっさ、

びよんぴよこ兎が、えっさっさ。
郵便はいだつ、えっさっさ。
唐黍ばたけを、えっさっさ。
向日葵垣根を、えっさっさ。
両手をふりふり、えっさっさ。
わき目もふらずに、えっさっさ。
「電報」「電報」えっさっさ。

たあんき、ぼうんき

たあんき、ぼうんき、たんころりん。
田螺がころころ啼いてゐる。

たあんき、ぼうんき、たんころりん。
鴉が田螺をつゝいてる。

たあんき、ぼうんき、たんころりん。
蛙が目ばかり出してゐる。

たあんき、ぼうんき、たんころりん。
ちんちん電車もやつて来る。

たあんき、ぼうんき、たんころりん。
お彼岸まわりもつゞいてる。

【註】「たんき、ぼうんき、たんころりん」は田螺が鴉につつかれる音です。
關東邊の童謡にあります。

かへろかへろ

かへろかへろと
なに見てかへる。

寺てらの築地ついでちの
影かげを見見みみいかへる。

「かへろが鳴くからかあへろ」

かへろかへろと
たれだれかへる。
お手々ててひきひき

ぼつりぼつりかへる。

「かへろが鳴くからかあへろ」

かへろかへろと
なにしてかへる。

畑はたの玉葱たまねぎ

たゝきたゝきかへる。

「かへろが鳴くからかあへろ」

かへろかへろと
どこまでかへる。
あかい燈あかひのつく

三丁さきへかへる。

「かへろが鳴くからかあへろ」

かやの木山

かやの木山の

かやの實は、

いつかこぼれて、

ひろはれて。

山家のお婆さは

ゐろり端、

粗朶たき、柴たき、

燈つけ、

かやの實、かやの實、

それ、爆せた、

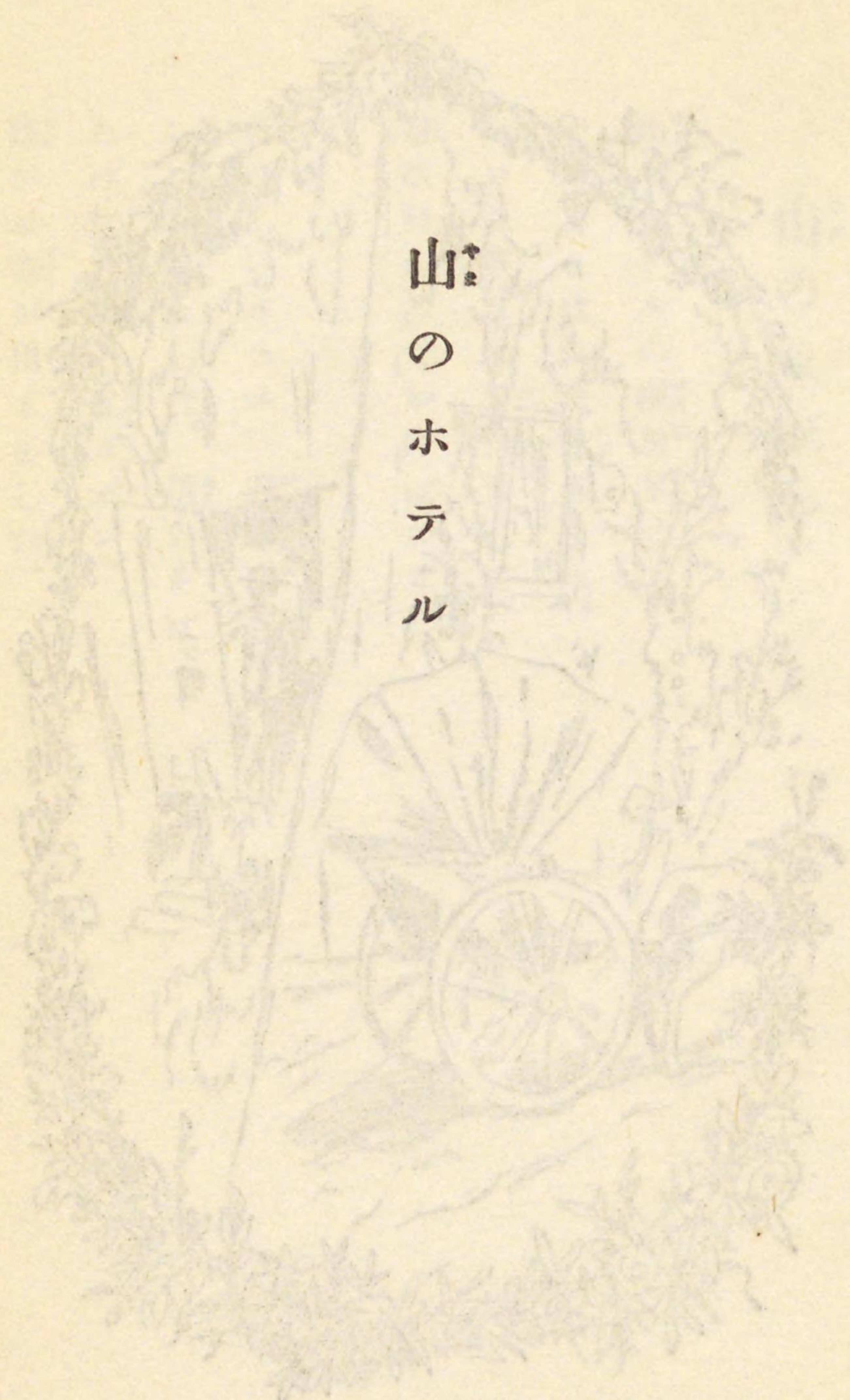
今夜も雨だろ、

もう寝よよ。

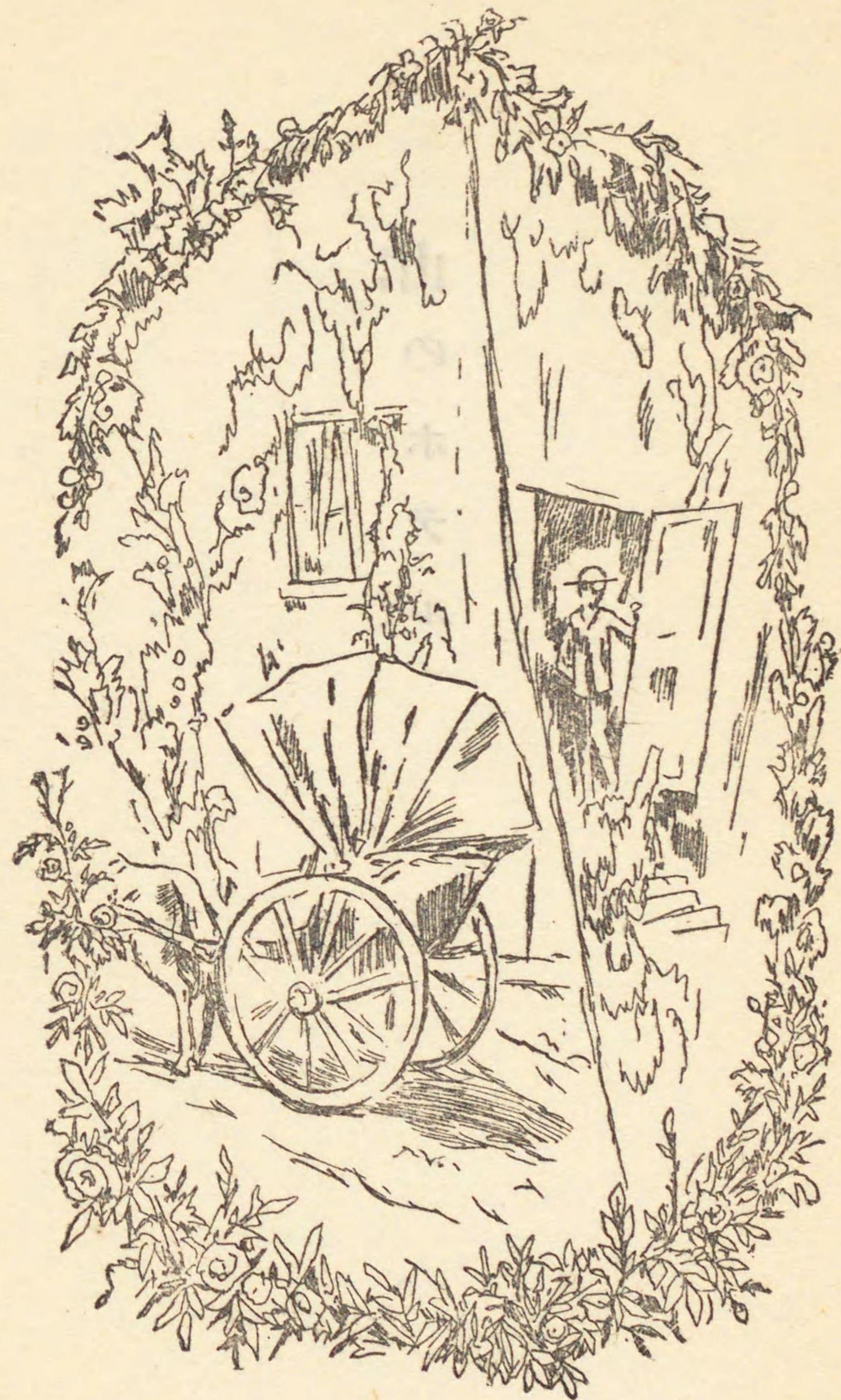
お猿が啼くだで

はよお眠よ。

山の
ホテル



山のホテル
の
風景
の
写真
集
の
目
録



山のホテル

山のホテルの幌馬車は、
いつもこはれた壁のまへ。
しめた戸口に日がさして、
晝はゆがんだかげばかり。

まづしいホテル、蔓の薔薇、
いつか見ました、道のそば。
あけた戸口の紅ズボン、
誰かお客が出てました。

追分

からまつはやしの林つゞきに、

ぼつぼつと家いえがあつたよ、

馬うまの繪馬えま、

門かどにかけてた。

白しろい馬うま、黒馬あをや、栗毛くりげや。

追分おひの宿しゆくのはづれに、

ちよつぽりと石いしがあつたよ。

お墓はかなの、

馬うまを祭まつつた。

死しんだ馬うま、かわいそな馬うま。

旅たびびとは西にしへ東ひがしへ、

ほいほいと馬うまで行いつたよ。

あかい日ひが、

原はらを染そめたよ。

小こにだ馬うま、幌馬車ほろばしやの馬うま。

からまつはやしの林はやしつゞきに、

ぼつぼつと家いえがあつたよ。

茶ちやのの花はな

茶ちやの花はな、

咲さく花はな、

畠はたけのの小道こみちな。

茶ちやの花はな、

よい花はな、

お日ひ和より、日ひ和よりな。

茶ちやの花はな、

ちる花はな、

兵隊へいたいさんがチラリな。

茶ちやの花はな、

茶ちやの花はな、

電話線でんわせんかけたな。

氷こほりののひわれ目め

氷こほりのひわれ目め、

月夜つきよには、

びちびち音ねして、

つめたいな。

氷こほりのひわれ目、

裏田圃うらたんぼ、

びちびち音ねして、

風かぜが吹ふく。

春はるまで

子こ供ども

鳥網張とりあみりには夜よが明あけて、

鈴鴨すずがもうつのは日ひが暮くれて、

晝間ひるまは父とうさん草鞋わらぢうち、

母かあさん、正月しょうがついつ来きます。

母はは親おや

鳥網張とりあみつたら、鳥舍とやかけて、

鈴鴨すずがもうつたら、餅もちついて、

みんなのお足袋たびも編あみあげて、

坊ぼうやよ、正月しょうがつちき来きます。

タノミツ

カヘル ガ カヘル ガ ナイテ キル。

タノ ミヅ フエロ、

タノ ミヅ フエロ、

ケロツク ケロツク ヌリアゼ デキタ。

タニシ ガ タニシ ガ ナイテ キル。

タノ ミヅ ヌルメ、

タノ ミヅ ヌルメ、

コロカラ コロカラ タネモミ マイタ。

スイシヤ ガ スイシヤ ガ マハツテ ル。

タノ ミヅ ヒカレ、

タノ ミヅ ヒカレ、

ギイトン、ギイトン、ヒバリ モ アガレ。

てふてふ

てふてふ、てふてふ、

からまつ山は、

まだ日が寒い。

ちらちら飛べよ。

てふてふ、てふてふ、

三月四月、

霧雲はやい。

濡れ濡れ飛べよ、

てふてふ、てふてふ、

から松原は、

もう芽が萌える。

木ぶかく飛べよ、

てふてふ、てふてふ、

ちんころぐさも、

林に赤い。

大きく飛べよ。

白樺の皮はぎ

白樺の皮をはがうよ、

春さきの山の林に。

灌木に鳴くはちやつちやだ、

ほら、枝に横を向いてる。

白樺の皮はくるりと、

手にはげばすぐに巻かるよ。

二輪馬車カタリコトリだ、

ほら、ちやっちや、じつと聴^きいてる。

白樺^{しらば}の皮^{かわ}はしろくて、

ぼちぼちとすちとがあかいよ。

あのちやっちや、かわゆかつたな、

ほら、遠^{とほ}い深^{たひ}で鳴^ないてる。

J^{ヂエイ}・O^{オー}・A^{エイ}・K^{ケイ}

落^おのはやしのかたつむり、

しろいおうちをたてました。

しろいおうちのかたつむり、

角^{つの}のアンテナ出^だしました。

ここは樺^{から}太^{ふと}真^ま岡^{おか}道^{みち}、

馬^{うま}の背^せよりも高^{たか}い落^お。

角^{つの}のアンテナ、かたつむり、

J^{ヂエイ}O^{オー}A^{エイ}K^{ケイ}きいてます。

アイヌの子

大豆^{だいづ}島^{ぼたじ}の

露草は

露にぬれぬれ、

かわいくな。

大豆島の

ほそ道を

ちひさいアイヌの

子がひとり。

いろはにほへど

ちりぬるを、

唐黍たべたべ

おぼえてく。

楡のかげ

楡の木のかげ、

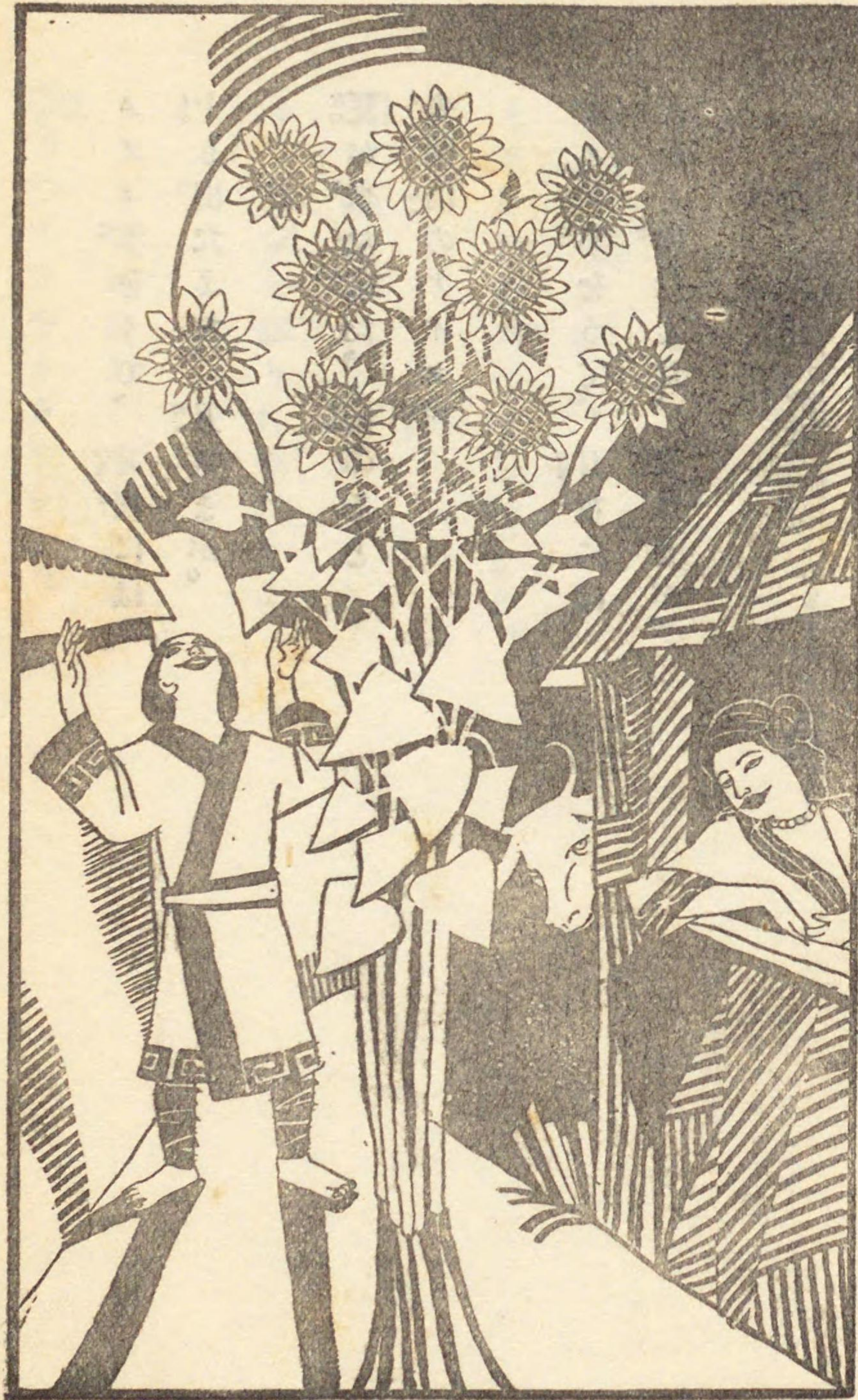
いゝ芝生、

鐘は梢に吊つてある。

農科大學、

ひるやすみ、

みんな寝てゐる、涼しそう。



こゝは札幌、
いまは夏、
風にてふてふも光つてる。

「お時間、お時間、

さあ起きた」

カララン、ラン、鐘が鳴る。

多蘭泊

軒より高い向日葵は
十も出たよだ、お日さまが。

メノコ手をうて、月夜には
十も出たよだ、月さまが。

夏が来た来た、家のそと
多蘭泊のアイヌ村。

メノコ手をうて、月夜には
とをも出たよだ、月さまが。

【註】多蘭泊は樺太の西岸にあるアイヌの村です。

とうきび

裏山で兄と弟よ、

とうきびを刈つてゐたとよ。

熊が出た、わうと出たとよ、
とうきびを採りに來たとよ。

とうきびはあかい毛だとよ、
波うつてさやりさやりよ。

そろら来た、熊はこはいよ、
そろそろと立つて来たよ。

兄の子は死んだふりだよ。
弟は息もつかずよ。

熊はたゞ、嗅いで行たとよ、
とうきびをしよつて行たとよ。

この話、これでおしまひ、
とうきびを焼いてたべましょ。

・ 庫 文 童 兒 本 日 ・

發行所 東京小石川 表町一〇九 振替東京二四六番 電話小石川三三〇・四八三番		昭和二年八月五日印刷	日本新童謡集
		昭和二年八月五日發行	〔非賣品〕
著者	北原白秋	編輯兼發行者	東京市小石川區表町一〇九 北原鐵雄
印刷者	東京市小石川區久堅町一〇八 君島潔	印刷所	東京市小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社

揚江・本製

・日本図書文庫・

日本図書文庫 昭和二十一年 五月 東京		東京 日本図書文庫
日本図書文庫 昭和二十一年 五月 東京	東京 日本図書文庫 昭和二十一年 五月 東京	東京 日本図書文庫 昭和二十一年 五月 東京

東京



児乙部全集-N-24



1200600485443

